

丁重語の周辺

——「おる」について——

坂 本 恵

0 はじめに

さきに、現代における「丁重語」の性質を、「致す」を中心に^①して論じた。同じ資料を用いて、「丁重語」とは少しく性質の異なる「おる」について同様の調査をした結果を報告したいと思う。「おる」と「丁重語」の違いを、江戸末期から現在までの歴史的な流れと、現在における姿について考えてみたいと思う。

現在、「おる」はいろいろな使われ方をしており、必ずしも丁重語とはいえないような例や、さらには敬語とはいえない例も多く見られる。現代の丁重語は昭和三十年代ごろからしたが、「おる」でもそれはいえるのか、また、現代のような多様性はいつごろからのものなのかを中心に考察したいと思う。資料は前回と同じ、東京出身を中心とする作家の小説（江戸末期は人情本を使用）の、会話部分である。一部、地の文も使用した。また、「おる」は、漢字書きで「居る」となった場合、「いる」とも読めるので、

かな書きの例だけをとった。

1.0 歴史的に

「丁重語」同様、江戸末期——資料の関係から天保期——から現在までを見る。便宜上、「丁重語」での分類をそのまま用い、江戸末期（明治二、三年ごろまで）、明治期（明治四十年ごろまで）、大正、昭和期（昭和三十年ごろまで）、現代（それ以降）にわけて考える。

1.1 江戸末期

ここで扱った時代以前の研究には、山崎久之氏の研究が^②ある。山崎氏によれば「おる」は「ののしり表現」の中に分類されており、その中に「ののしり表現でない「め」「おる」」があげられている。それには「自称代名詞又はそれと同格の体言に付いて、対称に対する最大の敬意を表わす。（謙讓表現）」という説明があり、

「娘めは災息でゐ居りますか」の例がある。⁽³⁾ そのほか、「う」を加えた「(て)をらう、(て)をろ」が武士ことばとされている。⁽⁴⁾

ののしり表現は、相手を低くするために使われるものであり、自を低くする謙讓表現と、主体を低くする、という働きにおいて共通している。はなして主体で使われた場合に、「最大の敬意、謙讓」になるわけで、天保期には、この用法が多い。主体がはなして(側)である例が全体の八割を占める。

例1 それはモウ、覚悟をいたして居ります。⁽⁵⁾ (『英対暖語』為永春水 天保九 早稲田大学図書館 二一五 H(はなして))

町人の娘 K(ききて)その恋人(以下、人情本はすべて

早稲田大学図書館蔵)

「致す」などの他の丁重語との共用の例も多く、現在見られる形と全く同じである。

この時代の他の丁重語では、ききてだけに配慮を払っていると考えられる表現、つまり、主体がはなして(側)でない例も、二三割ある。ところが「おる」ではそのような例は一割程度で少ない。

例2 お茶は未だ沸いて居ませんかえ。(『妹脊鳥』永春雅 天保

十一 前上 H町人の娘 Kその父親)

この形は新しいものである。はなして(側)に使う、また、ののしり表現に使う、ということは、主体を低くする働きがあるというところである。ところが、この例2では主体は「お茶」であり、主体を低くしているとは考えられない。ここでは、ききてに対す

る配慮だけで用いられているわけである。他の丁重語と同様の動きだが、「おる」では他に比べ割合は少ない。「おられる」も一例のみである。

例3 近頃まで秩父様の奥に勤めて居られました。(『縁結月下

菊柳亭種彦 天保十一 上十二 H商家の手代 K商人 主体ははなしての主人の娘)

ききてへの配慮だけで使う形は特に新しいもので「れる」のついた形も他の丁重語より少ないのだろう。

しかし、「ののしり表現」もなくなったわけではなく、例こそ少ないが(全体の五パーセントほど)存在する。

例4 これも矢張り小源次が盗み居つたに違ひはない。(『猿唄三

人娘』松亭金水・山々亭有人 慶応元年 五一中 H町人 K町人)

この「ののしり表現」はすべて連用形に直接つく形をとっている。一方、丁重語のもうひとつの特色、重々しい語感をもつ、武士独自の用法はどうだろう。この点はかなり異なる。武士の用例は非常に少ない。他の丁重語が武士の日常語ともいえるほどによく使われ、「致される」などの「れる」をつけた形も珍しくないのとは大きく違う。二例のみの「おられる」の例をあげる。

例5 是程の騒動を寝て居られて知らぬとは。(『伊呂波文庫』為

永春水他 天保年間 四十九 H役人 K武士)

例6 十右衛門さまは居られずとも、其娘のお前の事ゆゑ(『伊呂波文庫』二十 H武士 K武士の娘)

武士の使う例は、山崎氏の指摘のような、「(て)をろ(う)」の形ではなく、他の形と同じである。例が少ないことから、他の丁重語より重々しい語感がすくなかったことがうかがえる。

以上、江戸末期の「おる」は山崎氏の時代と異なる。新しい用法ができ、使われる形も固定してきた。他の丁重語とも大きく違い、謙譲、ききてへの配慮、ののしり、という三つの用法が中心で、武士の用法もある、という程度である。

1.2 明治期

変化をみせる。敬語としてでない使い方がでてくる。また、武士、旧武士階級による使用例も増え、他の丁重語同様、かたい、莊重な語感をもつようになったと思われる。一方、江戸末期にあった謙讓表現は依然として主流を占め、ききてだけに配慮を払った表現も多くなった。

武士、旧武士階級の用例には次のようなものがある。

例7 ぢゝむさい病人なぞを煮焼かへしにはしておられん。(『安愚楽鍋』 仮名垣魯文 用語索引 国立国語研究所 明治三、

四 三—上 藪医者独白)

もと準武士階級だった医者、それも相手のいない独白での例である。「おる」は短い間に武士の日常語となったようである。

これには、ひとつには方言の影響も考えられる。現在でもそうだが、「おる」は西日本では「いる」のかわりに、特別の待遇価値なしに使われているようである。この時期「おる」をよく使う

作家、末広鉄腸や須藤南翠はいずれも伊予の出身である。彼らは「おる」を特別な語としてでなく使っているようだ。

例8 夫子は何か御聞きこみになつて居りますか。(『花間鶯』 末

広鉄腸 明治二十 下・六 日政治家の妻 日その夫)

この例ではききてを主体として「おる」を使っている。「おられる」の使用例も多い。また、地の文にも使っている。

薩長を中心とする明治政府の官僚や官吏などが日常的に「おる」を使えば、「おる」はひとつには日常化し、待遇価値を失うことになり、他方ではそれを多く使う人々の立場を考えると、重々しい語感が加わったとも考えられる。このように考えると、この時代「おる」が大きく変化した理由が説明できる。

「おる」をよく用いたのは、最初は西日本出身の作家だけであったが、明治も末に近くなると、東京出身の作家もよく使うようになる。

例9 お前さん方は愈々怪く思ふかも知れん——いや、屹度然う

思つて居られるに違無い。(『新金色夜叉』 尾崎紅葉 明治三十二 二 日貫一 K初対面の夫婦)

この例は主体がききてである。

例10 「今来掛に郵便函の中を見たら入つて居りましたから持つ

て参りました。」お延の言葉は几帳面に改たまつてゐた。(『明暗』 夏目漱石 大正五 百四)

この例は大正の例だが、東京出身の漱石も、「改たまつてゐた」中に「おる」を入れている。

手紙文の中での使用もある。

例11 耕耘を試み居り候。(『縁談』須藤南翠 明治十九 続七)

これはのしり表現の形と同じだが、手紙——候文にはこの形が多い。同じ形の謙讓表現もある。

例12 愚妻などもかねてより近くは致し居りましたが。(『數の鶯』

三宅花圃 明治二十一 十二 H・K青年)

この形ののしり表現ももちろんある。

例13 唯一人の母親をよくも殺しをつたな。(『牡丹燈籠』三遊亭

円朝 明治十七 二十一の下 H・K 武士)

この時期に、現在の形はほぼ出揃ったとえる。ただし、現在の語感とは必ずしも一致しない例もある。いづれにしても、他の丁重語とは大きく違う。というより、丁重語として以外の使い方があ
る、と言わべきだろう。

2.3 大正、昭和期(三十年ごろまで)

この時期の「おる」は前の時期とあまり大きな違いはないが、ただ、ききてにのみ配慮を払う表現——主体がはなして(例)以外の例が増える。また、前の時代に多かった、重々しい語感で、あるいは待遇意識なしに用いられる例がすこし減る。他の丁重語と割合が似てくるのである。常に他の丁重語と違った動きをみせる「おる」が、一番丁重語に近い時代であるといえる。

「おる」にだけ見られる例は次のような待遇意識なしの例である。また、「おられる」という形も多い。

例14 伝助も東京へ使にやって誰も居らん。(『つゆのあとさき』

永井荷風 昭和六 五 H・K 嫁)

例15 先生はカントをどう思つてをられるんでせう。(『竹沢先生

と云ふ人』長興善郎 昭和十三 四 H・K 学生)

同時代の国語学者は「おる」をどのように見ているだろうか。

敬語に入れている人、入っていない人、二とおりみられる。三矢重松(一九〇八)⁽⁵⁾では、自卑にも卑罵にも「おる」は見あたらない。小林好日(一九二七)⁽⁶⁾でも、謙讓にも謹言にもない。また、山田孝雄(一九二四)⁽⁷⁾にも「おる」を分類した箇所はないが、「れる」の例として次の例がある。

例16 いつも元気な大木先生は目方を掛けながら、時々じやうだ
んを言つてをられる。

次の例もある。

例17 神様のお陰で達者で居られい。

これらを見ると、「をられる」を不自然だと思わなかったこと、また、「をる」を敬語——謙讓語だと思っていなかったことがうかがえる。

反対に、松下大三郎(一九二七)⁽⁸⁾は、「おる」を「致す」などの語とともに莊重態の中に入れている。三尾砂(一九四二)⁽⁹⁾は「をる」は『ゐる』の意の尊敬動詞「いらつしやる」に相對する謙讓の動詞であります、「動詞としての「をる」とちがつて準助動詞としての「をる」は、「てある」とおなじ範圍にひろく用ひられ、謙讓の準助動詞といふよりも、丁寧の準助動詞とでもいふべき用

法をしめします。」と指摘している。

「おる」には二とおりの解釈があるが、それは二とおりの姿を示したものだらう。この状況は現在も同じである。

このほか、「おる」には、地の文で使われる連用中止の用法がある。現在、よく使われるにもかかわらず、この時代にはほとんど見ることができない。わずかに次の二例のみである。

例18 すべての客は……残念がるより悦んでおり、ほっとしており、……本気に嘆き、落胆しておるのは、……彼女の母一人きりであることを。(真知子) 野上弥生子 昭和三七)

例19 級のものが残らず彼の知つてゐることを知つてをり、(若い息子) 野上弥生子 昭和七 六)

二例とも野上弥生子の例であり、例8に「落胆しておるのは」とあるように、「いる」のかわりに「おる」使っていると考えると、連用中止だけの特別な形と認めることはできない。野上弥生子は大分出身であり、この「おる」は待遇意識なしに、日常的に使うことから出てきた用例とも考えられるので、確実な例とはいえない。「おる」を謙譲あるいは丁重として使う一方、「おり、」を連用中止として待遇意識なしに使う用法は意外に新しい形だといえる。

2.0 現代

「おる」は以上にみたように、丁重語の性質をもち、他の丁重語同様の使われ方をしているが、それ以外の形もある。したがっ

て使われる「場」が限られてくる他の丁重語とは異なり、昭和三十年代以降を現代と限定することはできない。すくなくとも大正、昭和期の状況は現在と同様だろうと思われる。

現代を限定することはできないが、ともかく、現代の様相を、用例と内省から分類し、現代の「おる」の姿を明らかにしていきたいと思う。一口に言って「おる」には五つの顔がある。

2.1 丁重語として

「致す」などと同様の、丁重語としての形である。主体はなして(側)が多いが、必ずしもそうでない場合があり、場合によってはききても主体になることがある。主体を低くする、というより、主体を高くしないという消極的なはたらきにより、ことばづかに配慮していることを示す。ある意味では、美化語の性質、要素があるとも言える。美化語の多くと違い、はなして(側)のものに多く使われるという点はあるが、使われることにより、場面が高められるという効果は同じである。少しあらたまった語感をもち、ききてに対してと言うより、その「場」そのものに配慮を払っている。この点は「致す」などの丁重語と全く同じで、共用されることも多い。よく使われる場があり、放送、演説などである。

例20 ××君、おりましたら事務室へ。(校内放送で学生の呼び出し)

実際に聞いた例である。「いらっしゃる」を使う必要はなく、「い

ましたら」はおちつきが悪い。「おる」のもつかたい語感が放送にあらうようである。駅の構内放送でも同様の例をきいたことがある。

しかし「おる」の場合は、以下に示すような多様な形があるため、あらたまった語感とは他の語に比べると弱いようである。したがって、使われる「場」が限定されるということはなく、もうすこし広く使われていると言えよう。「ている」の形がよく使われる形であることも、その原因のひとつであらう。

例21 母の消息は今のところわかっておりません。(『女たちの海

峡』平岩弓枝 昭和五十五 H女性 K知人の女性)

2.2 「おられる」

「おられる」はよく問題になる語である。しかし、江戸末期からその用例はあり、それ以降、現代までずっと中断なく、よく使われている。東京出身の作家で「おられる」を最初に使ったのは尾崎紅葉で、永井荷風、大岡昇平などもよく使う。まして現代の作家は全く抵抗がないようだ。用例を見る限り、問題となるのが不思議なくらいである。

「おられる」は「いる」の敬語(尊敬語)として、ほとんど「いらっしゃる」と同様に使われる。ほとんどの場合、「いらっしゃる」とおきかえが可能である。おきかえができないのは次のような「である」の敬語である場合で、これからみても、「おられる」は「いる」の敬語だといえる。

例22 杏子さんお帰りでいらっしゃいましょうか。(『太郎物語大
学編』曾野綾子 昭和五十一 H学生 K友人の母 電話)

「いらっしゃる」、「おられる」が同一文脈で使われることも多い。

例23 お父様は大蔵省におられまして、御存命でございましたら、もちろん大臣をお勤めになっていらっしゃるようなお方とうけたまわっております。(『結婚します』山口瞳 昭和四十
見合いの席で仲人)

例24 「たびたびお邪魔してすみませんが、先生はおられますか」
(『警部』)

「いえ、出かけましたの」(先生は容疑者の妻)

「おや、そうですか。日曜日くらいはお宅でくつろいでいらっしゃるかと思ってお寄りしたんですが。」

「ついさっきまでおりましたんですけど……」

(『第三の女』夏樹静子 昭和五十三)

「いらっしゃる」との違いは何だろうか。「おられる」は「いらっしゃる」より敬意は軽いが、「おる」を使っているため、いくぶんかたい、あらたまった語感がある。「れる、られる」型の敬語として、とくに書きことばで使われやすい。

例25 最近、このことを作詞家の阿久悠氏に話したところ、氏は大笑いをされ、体を二つ折りにして苦しんでおられた。(『父の託状』向田邦子 昭和五十三 昔カレー)
ここでは「いらっしゃる」は使いにくい。

「おられる」は「いる」の尊敬語として、全く問題がないと思

われるのだが、それを認めない人がいるのも事実である。よく問題にする人たちを別にしても、作品の中に「おられる」を決して使わない作家も何人かいる。武者小路実篤や舟橋聖一、現代では平岩弓枝、斎藤栄といった人たちで、謙譲語、丁重語としての「おる」はよく使うが、「おられる」は一例もない。「おられる」に抵抗を感じ、使うことを潔しとしないのである。これらの作家がいずれも東京出身であることも注目に価する。

「おられる」はほとんど受入れられているが、抵抗し、認めない人も存在する。まだ完全な市民権を得たとは言にくい。

2.3 ののしりことばとして

「おる」の形で、また、伝統的なもののしり表現の形である、連用形に直接つく「しおる」の形で使われる。この表現は、内容からいっても老人がよく使う形のものである。

例26 恥さらしなことをしおって。(『殺意の時刻表』斎藤栄 昭和五十五 H祖父 K孫)

2.4 方言として

敬語とは思わない使い方は西日本の方言である。『日本語地図2』第五十三図に「いる」「おる」その他の分布図があり、「おる」を使う地域は西日本を中心に広範囲にあることがわかる。

例27 僕もう梯子もっておれないんだよ……(『陽のあたる坂道』石坂洋次郎 昭和三十二 H少年 Kその兄)

例28 私は無抵抗でをれとは云ってないよ。(『帰郷』大佛次郎 昭和二十三 H男 K若い男)

さきにあげた例14の「おらん」を含め、これら「ます」に続かない形は敬語ではない。方言である。これらの作者の出身地は必ずしも西日本ではないが、よく耳にする表現だから使われるのだらう。

2.5 連用中止として

さきに述べたように、現在では、文章の中にこの形を使うことが非常に多い。「い」という形はあまりに不安定だからだろう。現代の例は少なくないが次の例は比較的古い。

例29 友達はそれぞれに結婚していたが、恋の事件はほうぼうで起っており、節子は忠実な聴き役になった。(『美徳のよめ』三島由起夫 昭和三十二)

「おる」の待遇的価値が小さくなったことを示すよい例である。

3.0 まとめ

「おる」はすこしずつ新しい性格が加わるにつれ、変化してきた語といえる。新しいものが加わった時、古い形を捨てずにきた。したがって現在は、そのいろいろな形をすべてあわせもち、たくさんさんの顔をもった語になった。それが敬語と言われたり言われなかったり、よく問題にされたりする原因なのである。

注(1) 「現代丁重語の性質——「致す」を中心にして——」『国

語学研究と資料』七号

(2) 『国語待遇表現体系の研究近世編』

(3) 前掲書 P 422・423

(4) // P 536・537

(5)

(6) 『高等日本文法』 P 219 / 229

(7) 『国語国文法要義』 P 243 / 245

(8) 『敬語法の研究』 P 34 / 36

(9) 『標準日本文法』 P 393 / 396 / 391

『話しことばの文法』 P 376 / 391